

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



宮城県気仙沼市南郷三区自治会主催の「GBa サロン」。住民が集まって語り合う場所

特集 自治会が暮らしを豊かに

- 住民が住民を守っていく未来のまちづくり ③
あおい地区会（宮城県東松島市）
- 災害公営住宅から地域全体へ広がるコミュニティづくり ⑤
薄磯団地自治会（福島県いわき市）
- 住民を下から支える受け皿のような存在に ⑦
南郷三区自治会（宮城県気仙沼市）

☆専門家に聞く地域づくりのヒント

（山梨学院大学 法学部 政治行政学科 教授 竹端 寛さん）

場の力②⑥ ⑨

やました花いっぱい（宮城県山元町）

まちの仕組み⑪ ⑩

もれのない見守りとつながりづくりのサポート（宮城県名取市）

場の力⑲ ⑫

安達太良応急仮設住宅集会所前（福島県大玉村）

東北の元気⑳ ⑬

牛橋地区（宮城県山元町）

平成・向こう三軒両隣事情⑭ ⑭

ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

「第1回 宮城発 これからの福祉を考える全国セミナー」開催！

「S-1グランプリ 第4回いがす大賞」出場者決定！⑯



特集

自治会が 暮らしを豊かに

本紙でもたびたび特集を組んできた自治会活動。

今回特集する自治会は、いずれも震災後につくられた、集団移転団地と災害公営住宅の自治会です。

宮城県東松島市のおおい地区会は、移住前からブロックごとに話し合つて区画を決めるなど、住民が安心・安全に暮らせるまちを目指しています。

福島県いわき市にある薄磯団地自治会は、学生ボランティアの力を借り、周辺地域の住民とも交流しています。

宮城県気仙沼市の南郷三区自治会は、駐車場やゴミの問題などにも前向きに取り組み、イベントやサロンを開催し、住民をつないでいます。

住民の生活を守り、つながりを生み、暮らしを豊かにしていく自治会の目的は、どこであっても共通するもののはず。

各自治会のあゆみをたどりながら、自分のまちとも重ねあわせて、「自治会活動」について考えてみませんか。



住民たちでもちつき（夏祭りでのひとコマ）

住民が住民を守っていく未来のまちづくり

◎あおい地区会（宮城県東松島市）

ポイント

- 住民を守り、住みよい地区にするための要望を集約する場を設ける。行政にも意思を明確化して伝える
- 将来は、住民同士で自主的に支え合える体制の確立を目指す

「自分たちの子ども、孫の世代にもよろこばれるまちをつくりたい」とは、あおい地区の防災集団移転地住民で、あおい地区会会長を務める小野竹一さんの言葉だ。同地区会は、数十年先も見据えたまちづくりを進めている。

東松島市あおい地区（旧・東矢本駅北地区）は、道路を挟んで北側に災害（復興）公営住宅307戸（うち、1戸建てが160戸、集合住宅が77戸、2戸1棟が70戸）があり、南側に防災集団移転273区画がある。合計580世帯が暮らす市内最大の集団移転地だ。

当初は、復興公営住宅だけで自治会をつくる話もあった。しかし、「同復興公営住宅の高齢化率は約48%、単居率は約60%と高く、10年後には老々介護になり、自治会がまわらなくなる」と危惧した小野さんたちは反対。結果、南北に縦断する形で、復興公営住宅と自立再建住宅とで一つの自治会をつくることになった。1丁目から3丁目まで同条件で、合計3つの自治会を設立。「自立再建は」若い

人がいて家を建てる場合が多い。新しい家族が生まれてくるから、まちとして長く続く。復興公営住宅の人たちを元氣な若い人たちが守っていく自治会をつくらないといけない」と小野さんは話す。

はじめは、
まちづくり整備協議会

集団移転開始前の12年11月から、小野さんたちは「東矢本駅北地区（のちにあおい地区に改名）まちづくり整備協議会」を設立。まちづくりに必要なことを検討してきた。さまざまな地域から人が集まる同地区の背景を考慮し、以前住んでいた各行政区から、少なくとも1人は役員に選出される仕組みをとった。各行政区の先例や違いもふまえた議論につなげるためだ。同協議会の大きな成果は、13年11月に行った、自立再建者全世帯での区画決めだ。地区を14のブロックに分け、希望するブロックを申し込み、住民同士が話し合う場を設けた。「親子・親戚と近くに住みたい」

あおい地区会 会長 小野 竹一さん

「さまざまなことを決めていくのに、井戸端会議のような、意見を出せる場を設け、その人の発言を最後まで聞くことが大事だと思います。最終的には、住民全員の意見として、総会で決めていきます」



「震災以前隣同士だった人のそばに」といった要望を叶えるため、抽選は最終手段として、まずは住民同士の話し合いで決めてもらった。話し合いでは、「認知症がある同居者が迷わないように角の区画にしてほしい」と希望が出ると、住民が率先して譲り合ったという。「入居後も見守りを心がけるよ」という声も聞かえてきて、住民同士の支え合いの萌芽となった。

住宅の建設前には、工務店とハウスメーカー45社を招き、各社のPRや相談会も開催している。復興公営住宅についても住民の声を聞き、希望の数だけ平屋建てをつくらせてもらった。

同協議会の働きかけで、地区の名称も新しく決めた。全国から公募した名称候補をもとに、住民同士が話し合い、青い海、空、田んぼ、ブルーインパルスといった東松島市のイメージを表す「あおい地区」に決まった。

地区内に3棟ある集会所と4つある公園は、住民がそれぞれ異なる用途で使うことを想定して建設され



復興公営住宅に飾りつけたイルミネーションのきらめきに住民から感嘆の声

た。これも同協議会が、行政に要望を出したものだ。各公園は四季がモチーフとなっており、二丁目にある公園は（スポーツの）秋をイメージし、合計20もの健康遊具（全国最大数！）を備えた健康づくりのための公園となっている。

それ以外にも、同協議会は景観や安全に配慮した街並みルールを作成して、住民にも検討してもらって、条例化をした。また、復興公営住宅はペット飼育禁止だったが、住民から震災で亡くした家族の代わりに、当時から飼っていたペットと暮らし続けたいとの声があった。そこで、行政へペット飼育を要望するうちに、ペットクラブという組織が生まれている。現在はペッ

トのマナー周知や散歩を介した地域の見守りも行う。

3つの自治会を統括する あおい地区会の設立へ

14年11月からは、あおい地区への移転が始まった。小野さんは、移住前には矢本運動公園仮設住宅の自治会長も務めていた（本紙1号参照）。小野さんたち同仮設住宅の役員はあおい地区に移住後も、17年3月まで仮設住宅自治会の運営サポートを続ける。人が減っても自治会が維持できるようにと、残った人のために仮設住宅へ足を運んでいる。

16年4月には、3つの自治会を束ねる自治会連合会として、あおい地区会が設立された。「別々に行事を行うより、大人数で行ったほうが楽しいですよ。行政に交渉する時にも地区全体で交渉したほうが、話が通りやすいはず」と、小野さんは3つの自治会運営を尊重しつつも、連携させた働きの必要性を語る。

16年9月には、まちづくり整備協議会が解散し、今後、同地区会はその役割も

引き継いでいく。

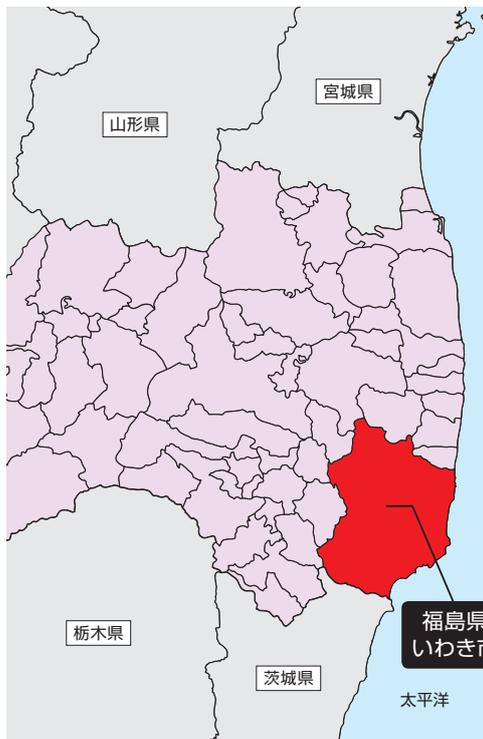
今後のあおい地区会としては、住民による住民への見守り活動を計画中だ。ボランティアでサポーターを募集し、将来的には研修会を行い、自分たちだけでも訪問活動ができる体制を整えていく。ほかにも、農園活動を予定。農作業をとおして、高齢住民の役割づくりも目指す。17年1月には、お正月の凧づくりを行う。住民が講師となり、子どもたちも呼び、子どもの親世代にも自治会活動へ参加してもらおう契機にできた、との願いもある。

最後に、小野さんに新年の抱負を伺ったところ、「ここからが本当のスタート。将来に向かって、日本一の町になれるような活動をこれからも続けていきたい」と話してくれた。田

DATA

あおい地区会

東松島市あおい地区会事務局
宮城県東松島市あおい一丁目10番地2 あおい西集会所内
TEL 0225-90-4891
E-Mail aoi-chikukai@navy.plala.or.jp



薄磯団地自治会といわきまごころ双葉会との合同イベント

災害公営住宅から地域全体へ広がる コミュニティづくり

◎薄磯団地自治会（福島県いわき市平薄磯地区）

ポイント

- 学生ボランティアや団地外の住民と積極的に交流し、開かれた活気ある雰囲気づくり
- 団地内だけでなく、地区全体のコミュニティの基盤となることを目指す

いわき市の沿岸部にある薄磯地区。かつて塩屋崎灯台や薄磯海水浴場を訪れる人でにぎわっていた同地区では、東日本大震災の津波により甚大な被害を受け、現在では復興に向けたまちづくりや宅地造成などが進んでいる。

2014年に完成した災害公営住宅薄磯団地では、自治会を中心にコミュニティの再生に向けた取り組みが行われている。

話し合いを重ね、自分たちの力で環境を整える

同団地では14年12月20日に自治会が設立。1号棟と2号棟の各階と、戸建て住宅に一人ずつ輪番制で班長をおき、そのなかから自治会役員を選出する方式をとっている。そのほかに、駐車場管理部会として5人の役員をおいており、

これも含めた総勢21人が自治会の役員の任にあたっている。毎月第2日曜日の夕方、に定例会を開き、自治会の運営について話し合いを行っている。

自治会の設立当初は、団

地内の設備も十分ではなく、自治会費はもちろん、助成金や協賛金などを用いて集会所内や団地敷地内の設備の充実をはかってきた。

「最初は、集会所に椅子や机すらありませんでした。何が必要なのか、どうやったらそれを用意できるのか、みんなでひとつずつ考えて、話し合いながら決めてきました」と同団地自治会会長の大河内喜男さんは話す。

団地敷地内におかれたボランティアやベンチなども、住民の声を反映しながら、自治会が主導して増やしてきたものだ。少しずつではあるが、自分たちの力で住みよい団地をつくるため、自治会の設立から約2年間、歩みを進めてきた。

交流人口を増やし、開かれた団地に

同団地自治会の活動に欠かせないのが、学生ボランティアの力だ。東北大学や立教大学などを中心に、4つの大学の学生が定期的に同団地を訪れ、イベントの運営の手伝いなどを行っている。

災害公営住宅「薄磯団地」自治会 会長 大河内 喜男さん

「コミュニティを育てていくためには、住民一人ひとりが主体的に参加することがたいせつ」



同団地には高齢の住民が多く、住民だけの力では運営などに心もとない部分も多いという。そのため、学生ボランティアの若い力を借りて、活気あるイベントを維持しているが、頼るばかりではない。「学生さんが、災害公営住宅という現場に入るきっかけを提供したい。ただ手伝いに来るだけでなく、団地の現状の良い面も悪い面もあわせて見てもらえたら」と大河内さんは話す。

実際に、同団地にボランティアに來たことが、自分の進路を考えなおすきっかけになった学生や、就職したあとにも休暇をとり、同団地に足を運ぶ元学生もあり、多くの学生にとつての学びの場所となっているという。

また、団地外の住民との交流も盛んに行われている。14年9月には、いわき市内でみなし仮設や賃貸住宅、自立再建した自宅に住む双葉町民のグループ「いわきまごころ双葉会」から交流の申し出があった。

同会のメンバーは福島第一原子力発電所の事故の影響で、町外への避難を余儀なくされた住民たちだ。



田園調布学院大学の学生ボランティアによるミニ縁日

「住む場所を追われ、いわき市にやってきた人たちを、市民として暖かく迎え入れたい」という思いから、交流がスタートした。

これまで何度か合同でのイベントを行っており、16年7月には合同で作成した七夕飾りを同市平地区の七夕祭りに出品した。

「団地内での交流も必要だが、あまり閉じた雰囲気になってしまうのもよくない。交流人口を増やして、開かれた団地になっていけ

ば」と大河内さんは話す。

みんなで協力し合えるコミュニティづくりを

同団地の建つ薄磯地区では、宅地の造成が進められている。180区画が整備される予定だが、住宅の建設が決まっているのは30区画ほどだ。

「広い造成地に住宅が点在する形になり、コミュニティの維持が難しくなるのではないかと大河内さんは危惧している。

同団地の入居者は、約7割が震災前から薄磯地区に住んでいた住民だということもあり、将来的に造成地の住民とともに地域づくりを行っていくことが予想される。安心して新しい住民を受け入れるための安定したコミュニティの基盤づくりが、これからの課題だ。入居開始から約2年半が経ち、イベントは回を重ねるごとに、自治会役員以外の

住民の協力が増えている。開催のお知らせを目にした住民が、「何か手伝うことはないか」と声をかけてくることも増えたという。

大河内さんは、「コミュニティを育てていくためには、それぞれが主体的に参加することがたいせつ。これからもみんなで協力して、何かをする機会を継続して設けていきたい」と展望を語った。

最近では、カラオケや園芸などの趣味の会が立ちあがるなど、徐々に住民自ら行う活動も増えてきている。自治会の設立から3年を迎える17年。団地だけでなく、地域全体のコミュニティづくりを目指して、同団地は着実に歩みを進めていく。吉

DATA

薄磯団地自治会

福島県いわき市に整備された市営災害公営住宅。集合住宅2棟、戸建て住宅18戸に101世帯が居住する。14年7月に1号棟が、同年12月に戸建て住宅と2号棟の入居が開始された。



健康体操に取り組むサロン参加者

住民を下から支える受け皿のような存在に

◎南郷三区自治会（宮城県気仙沼市）

ポイント

- 自治会長から住民に声がけをして、住宅内のトラブルに対処
- 行政の力も借りながら、サロン活動や住民の見守りといった各種活動に取り組む

「生活援助員（高齢者相談室）が帰ったあとや週末に何かあることが多い」「高齢者は体調が悪くても（生活援助員が訪問すると）元氣そうにふるまっているみたい」「住民同士の支え合いが課題」これは、宮城県気仙沼市の南郷住宅（南郷地区災害公営住宅）の自治会活動について話し合う、南郷三区自治会長の藤原武寛さんと同副会長の平山十三男とみおさんの話し合いの光景だ。住民のため、心を砕く2人の姿がうかがえる。

同住宅は、6階建ての2・3号棟が2015年1月末から、10階建ての1号棟が3月末から入居開始で計3棟の164世帯が入居済みだ。

15年1月に自治会組織をつくるための準備会を結成。市役所職員から勧められ、藤原さんが会長を務めることに。かつて同じ職場だった平山さんが「あんたがやるなら協力するよ」と副会長につき、サポートを担う。

入居後、同住宅のゴミ集積場には、分別されず袋詰めもされていないゴミが大

量に投棄されていた。注意喚起をしようにも、準備会では権限がないと知り、藤原さんたちが主導して市役所の協力を得ながら、自治会を15年7月に設立。ゴミ問題は、当番制のほかに月1回の清掃日を決めて呼びかけた。すると、多くの住民が自主的に参加。現在は問題が改善し、「清掃用具が足りない」など住民側から逆に提案をしてくれるようになって「皆さんに助けられている」と藤原さんは話す。

住宅内では騒音問題も頻発。大声や夜間の引き戸の開閉音が響いてしまうのだ。ストレスや飲酒、高齢で耳が遠いことなどから、声が大きくなってしまう事情もある。騒音苦情を訴える側も、二戸建てや震災前の環境から集合住宅に移住したことでの不慣れさやストレスを抱えていることで、ささいな音が気になってしまう場合もある。自治会長が間に立ち、ケースによっては関係機関の協力を仰ぎながら音を控えるように配慮してもらい、時に苦情を訴える側にも寛容になってもらうよう

働きかける。

多様なストレス問題は、一旦聞き取ったあと、専門家である、市の健康増進課の精神保健福祉士や地域包括支援センターの看護師などに相談し、協力をお願いしている。なお、市の地域包括支援センターや健康増進課、県保健福祉事務所には、自治会長の判断で戸別に住民の見守りも依頼している。それとは別に、住民有志6人ほどでも見守りを行っているが、通常の見守りだけでは対応しきれない部分もあり、冒頭にあげたように、自治会の課題ともなっている。

自治会活動としては、認知症サポーター養成講座や防災訓練、救命講習、夏祭り、敬老会、クリスマス会、新年会、地元中学校との交流会などを開催してきた。毎週火曜日は、自治会主催の高齢者交流サロン「G・B・aサロン」を同住宅集会所で開催している。サロンでは、お茶飲みや脳トレ、合唱、体操、踊りなどのほか、新たにできた気仙沼市独自の健康体操「海潮音体操」が行われている。

同体操の効果を検証する目的もあって、3ヶ月間にわたり地域包括支援センターの保健師が、社会福祉協議会の生活支援相談員らの協力のもと、健康測定も行った。同サロンは、「ここに来ると元気をもらえる」と、住民の生活の一部になっている。課題として、「サロンに出てくる人はいいが、出てこない人をどうするか。いろいろな趣味の集まりをつくれたら」と藤原さんたちは話す。

新年の抱負として、藤原さんは「事件、事故が起きないように心を配る。不平不満を持った同人士がぶつからないよう、必要なワークショップになれば。自分たちに手助けできることがあるば、これまで以上にできるようにしたい」と語ってくれた。■



サロン世話人代表の佐藤淑枝さんと南郷三区自治会長の藤原武寛さん

山梨学院大学 法学部 政治行政学科 教授

竹端 寛 (たけばた・ひろし) さん

1975年、京都府京都市生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士(人間科学)。専門は福祉社会学、地域福祉論。著書に『自分たちで創る現場を変える地域包括ケアシステム』(ミネルヴァ書房)、『枠組み外しの旅-「個性化」が変える福祉社会』(青灯社)、『権利擁護が支援を変える-セルフアドボカシーから虐待防止まで』(現代書館)など。



専門家に聞く地域づくりのヒント

「自分事」としての自治会

「何が必要なのか、どうやったらそれを用意できるのか、みんなですべてひとつずつ考えて、話し合いながら決めてきました」と自治会長が語る「薄磯団地自治会」。区画決めの際にブロックごとに話し合う場をつくってきた「あおい地区会」。住宅内の騒音問題についても、お互いのしんどさ・生活のしづらさに目を向けようとする「南郷三区自治会」。この3つの自治会に共通するのは、行政に言われたから、役が回ってきたから、いやいや・仕方なしに引き受ける、という「他人事」の姿勢ではなく、自分たちの地域を自分たちでつくっていき、という「自分事」の姿勢です。そして、それこそ自治会活動の究極のゴールでもあります。

人は、役割や誇り、責任をもっている限り、生きいきと暮らし続けられます。逆に言えば、いくら貯金があっても、子や孫とともに暮らしていても、自分自身に役割や誇り、責任がなければ、生きている意味や価値を見出しにくい存在です。子どもから青年期にかけては、自分の人生で手いっぱい。子育て期になって、少しはご近所のことにも目を向ける余裕が出てきますが、壮年期以降や退職後などに、やっとじっくり地域活動に目

を向ける余裕が出てきます。そのとき、自治会活動が自分自身の役割や誇り、責任などの自分の人生や実存につながると、やり甲斐も出てきますし、「自分事」として地域づくりに取り組むこともできます。この3地区では、そんな「自分事」の担い手がたくさんいるのだろうか、と拝読して感じました。

「すべきだ」「しなければならない」という義務感で動くことは、なんだか気が乗りません。一方、「〇〇したい」と思って動くことは、頼まれなくても勝手に展開していきます。いま、閉塞感のある自治会では、義務感で雁字搦めになってはいないでしょうか？ ひとつひとつの活動を見直して、本当に「すべき」ことは何か、を見直す必要があります。そのうえで、多くの住民がよることで「参加したい」と思える活動とは何か。それをみんなで話し合う。前例踏襲主義に陥らず、いまの時代に必要な姿を、年齢や立場、居住年数に関係なく、平等に意見を出し合う。そんなプロセスの積み重ねが、10年後、20年後も消滅しない自治会活動を生み出していくのだと思います。

そういう意味では、被災地で新たにつくり上げた自治会だからこそ、時代の最先端を行くのかも、しれません。

ビニールハウスのなかには、テーブルやストーブ、冷蔵庫がそろい、居間の一室と見まがう。外からは一見してわからない空間は、大人の秘密基地のようだ。

このビニールハウスでお茶飲みをし、残り2棟あるビニールハウスで、花を育てて楽しんでいる「やました花いっぱい」。

料理を持ち寄って集まるお茶飲みは、笑顔の花が咲く場所だ。

花の世話を楽しみ、自由に来て、集まれる場所



「草むしりなどで、身体を動かしたあとのお茶がいいんだよね」と参加者



持ち寄った手料理の数々



会長の岩佐嘉さん



ビニールハウス内の色鮮やかな花々



会長の所有地に、農家から譲り受けたビニールハウスを建てた

山元町山下地区内。旧山下町役場があった大通りの奥に、3棟のビニールハウスがあり、地域の住民が集まっている。やました花いっぱい、ハウスのなかや、区内に4か所もつ花壇で、花を育てているのだ。

会長を務める岩佐嘉さんたちの手で、「地区を花でいっぱいにし、みんなで交流する」目的で1997年に始まった同会。これまで、現・町役場の花壇づくりや、花を植えたプランターの区内全戸配付、町内行事への出店などを行ってきた。約20人で活動し、年会費は1000円。ピオラ、葉ボタン、マリーゴールドなど、育てやすく、長く咲く花を種から育ててきた。毎日、3〜4人ずつの当番制で、水やりなど花の世話をする。全体の管理は副会長の大友俊一さんが担当し、「花は手をかけた分、いいものになる。こんなに面白い仕事はない」と話す。一仕事終えたあとは、当番以外も集まり、にぎやかにお茶飲み。

会員は60歳代から80歳代となり、負担にならないよう、今年度からは苗の数を減らして出店も控え、お茶飲みと会員相互の親睦を活動の主眼におく。会員は全員で旅行に行くほど仲がよく、「会のおかげで、元気になった」と話す人も。住民の健康



もれのない見守りとつながりづくりのサポート

宮城県名取市



海と空の2つの港をもつ、宮城県名取市。自慢の閑上港と仙台空港も、東日本大震災では津波によって大きな被害を受けた。

現在7万7845人が暮らす同市は広範囲に浸水し、死者923人、行方不明者39人。建物は、住家と非住家を合わせて全壊が3765件、大規模半壊・半壊が1584件だった。

仮設住宅団地を毎日見守り

仮設住宅団地は、最大時の2013年10月末時点で8か所あり、980戸2193人が入居。みなし仮設（借り上げ賃貸）住宅には1204戸3454人が暮らしていた。市内のすべての仮設住宅団地には、2011年9月から、

市社会福祉協議会が運営する「なとり復興支援センターひより」の相談員が、

平日・休日ともに、9時から16時の間仮設住宅団地の集会所に常駐し、団地の入居者たちの細かな変化を見逃さないように見守りをしている。

相談員は、団地内の巡回や戸別訪問をしたり、ボランティア団体との調整などにあたる。毎日各戸を訪問し、健康状態や生活の不安がないかを気にかける。いつも顔が見えていて、人となりかわれば、入居者も安心して相談しやすい。

障がいのある入居者ともじっくりと関わることで日常的な過ごし方について話し合う関係を築き、買い物に出かけたり、家族に料理を出したりするなどの変化を身近で見守り、生活の自立性を高める手伝いもできている。

ひよりの主任コーディネーターを務める関雅子さんは、「たいせつなのは、

小さな変化にも気づけるようアンテナを張り、幅広い話題に対応すること」と話す。自立心の妨げにならない範囲での支援を心がけ、解決したい課題についても、入居者自身が周囲の人たちとのつながりのなかで役割や自主性をもって向き合えるよう尊重する。

同市の仮設住宅団地はそれぞれ設置から7年間



仮設住宅入居者を訪問する、なとり復興支援センターひよりの相談員

は一律延長され、8年目以降は入居者の状況に応じて特定延長となる予定だ。入居者が減ることで、自治会活動の維持が難しくなり、団地内の自治力低下が懸念される。しかし、現在仮設住宅団地のなかには、自主的にお茶会をするようになった人たちや、ボランティアに食事をするふるまい、もてなしをする人たちが増え、自分たちで企画した季節行事などに周辺の地域住民を招くようになった団地もある。

団地入居者の暮らしは、ひよりだけでサポートするのではなく、毎月、市生活再建支援課、市保健センター、名取東地域包括支援センター、訪問看護財団、みやぎ心のケアセンターなどの支援機関が集まり、各仮設住宅団地に関して情報交換会を実施している。



地域の集会所で仮設住宅の入居者と近隣の住民が健康体操

みなし仮設住宅へも手厚く

みなし仮設住宅の入居者や自宅を再建した人に対して、戸別訪問や市内におけるコミュニティ形成のサポートで見守るのは、市の「サポートセンターどっと・なとり」だ。そのなかで、訪問を通じた見守りは市直営の生活相談員が担当。保育士や看護師などの資格を



にぎやかさが伝わってくる、サポートセンターどっと・なとり運営の常設サロン

もつ生活相談員もいて、暮らしのなかの困りごとのほか、専門的な相談にも幅広く対応する。

コミュニティ形成のサポートは、公益社団法人青年海外協力協会が受託し、常設サロンを市内3か所と、隣接する仙台市太白区の1か所で運営している。月曜日から金曜日の9時30分から16時30分まで開所し、各サロンには地域リーダーが2人常駐している。総括の菊地麻理子さんは、「サロンは仲間に会えるところ、仲間をつくるということ、ということを理解してもら

い足を運んでもらえるよう努めてきました」と話す。サロンでは、手芸や料理、ストレッチなどの活動とお茶つこをする。利用者は、暮らしの話、旅行の話、時に合わせた行事の話などで盛り上がり、交流しながら自由な時間を楽しめる。福島県から避難して名取市に落ち着いた人もサロンに参加し、ほかの利用者との会話を楽しんでいる。全体的に60歳以上の女性が多く、男性もより参加しやすくなるよう、健康麻雀や体操、映画鑑賞会も企画している。

震災以前には同じ地域で生活していても深く交流することはなかった利用者が、サロンで知り合い、同郷出身者だという接点で会話が弾むこともある。週に何回か足を運ぶ利用者も多く、「家で過ごす時間が長く感じる」「ここに来るとスッキリする」と話す。サロンに手づくり料理を持って来たり、掃除や手伝いをしてくれたり、子どもたちが遊ぶ段ボールの家が年月を経て傷んだのを見かねてつくり直

したり、サロン利用者は楽しみながら、そこでの役割を見つけているようだ。サロンの目的は、知り合った人同士の助け合いを育み、暮らしの基盤を震災前のように地域中心のものへ移行させること。みなし仮設住宅の入居者以外ともふれあってもらおうと、地域の集会所・公民館を会場に、移動サロンも開催する。運営にあたっては、その地元町内会会長らとも連携し、仮設住宅などに入居していない、在宅被災者への声かけも、同会長らをとおして行っている。

サロンで生まれたつながりを活用して、一緒に昼食やカラオケに出かけたり、サロンに頼りすぎず「自分たちで集まってみようか」という声も上がる。公民館で開かれるサークルに参加する人たちもいれば、市内で開かれる音楽祭などに、サロンの利用者同士、男女混合チームで出場したりもする。そのような地域での催しへ積極的に参加する人もだんだん増えているという。



サロン内には利用者の作品も多く置かれ、あたたかみがある

支え合いでまちを力強く

同市の復興公営住宅は計画設置戸数716戸で、すでに完成して引き渡しが進んでいるのは115戸。仮設住宅から復興公営住宅への転居が最も盛んになるのは、2017年からだ。

復興公営住宅の入居時期に合わせ、市やひより、地域包括支援センターなどでは、前もってミーティングを開催し、見守りのための情報交換をしている。ひよりが各仮設住宅団地入居者の「見守り連携シート」を作成し、暮らしぶりなどを整理して、復興公営住宅を

支援するどっと・なとりに情報を引き継ぐ。仮設住宅から復興公営住宅へ移る人には、転居までに、ひよりの職員がどっと・なとりの職員と一緒に訪問して顔なじみをすることもある。

市内には復興公営住宅と仮設住宅の住民で、独自に合同のお茶会をしているところもある。当初はボランティア団体が始めたお茶会だったが、入居者に運営が委ねられ、いまでは自分たちで継続的に開催するようになった。ほかにも、復興公営住宅の入居者と周辺の地域住民が、一緒に月1回の体操教室をしているところもあるという。

市では地域包括支援センターを中心に、復興事業と並行して「通いの場づくり」を促進。ご当地体操や介護予防サポーター育成などとお茶会を組み合わせながら、住民同士のつながりや助け合いをより一層強められるようサポートする。被災の程度にかかわらず、まち全体の住民が身近なところでまじわり、支え合う仕組みづくりを推し進めようとしている。

仮設住宅への入居から5年

見知らぬまちでの生活を

ともに形づくってきた隣人たち

自立再建をして転居する人

復興公営住宅へ入居する人

それぞれが新しい道を歩み始めて

少しずつ環境が変化していくなか

5年前から変わらずに続く

日々に根づいた集いの場がある

男性が気軽に集まる
日常のなかの集いの場



たき火を囲んでの世間話。会話の端々に、お互いを気づかう言葉が混じる

DATA

安達太良応急仮設住宅

福島県富岡町からの原発事故避難者が居住する仮設住宅。234戸が整備され、2011年6月22日より入居が開始された。隣接する敷地に復興公営住宅の大玉村横堀平地（戸建て住宅3街区59戸）が整備されており、2015年9月に1街区の、2016年1月に2、3街区の入居が開始され、転居が進んでいる。



たき火用の端材は、近所の製材所から分けてもらっている



転居が進み空室が目立つ仮設住宅。駐車場にも車の数は少ない

福島県大玉村 ◎ 安達太良^{あだたら}応急^あ仮設住宅集会所前

福島県大玉村にある安達太良応急仮設住宅の集会所前に、早朝から男性住民が集まる場所がある。たき火用のドラム缶を囲むように、何台かのベンチが置かれたそのスペースは、同仮設住宅ができた当初からの男性住民たちの集いの場だ。集まる時間は特に決まっていないが、最初に来た住民が火をおこしていると、1人、また1人と人が増え、毎回3〜4人が集まると言う。火の様子を見ながらぼつぼつと交わされる会話は「最近急に寒くなったね」「病院は行ったの？」など他愛のない内容だが、参加者の1人が「ここが一番多くの男性が集まってくる」と言うように、男性住民たちの憩いの場になっている。

自立再建や復興公営住宅への転居により住民が減少し、同仮設住宅に居住する世帯は12世帯。同仮設住宅では隣接する敷地に戸建ての復興公営住宅が整備されており、集会所前に集まっている男性住民は、ほとんどが復興公営住宅へ転居した住民だ。18年3月から、随時集会所も含めた同仮設住宅の施設の取り壊しが予定されている。

サロンや交流会よりも気軽に、毎日集まれる集いの場。環境が変化してもこの場所が失われないことを願うばかりだ。^吉



33回目

市民リレー

東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

6団体が発足!以前以上に住民交流が活発に

◎牛橋地区(宮城県山元町)



餅つきは地域交流の場



餅をちぎって餡と和える作業も手際よく



地元の災害FM「りんごラジオ」のインタビューに応じる、区長の斎藤智博さん

海水浴や潮干狩りが楽しめる、浜沿いの山元町牛橋地区。震災後、人口は480世帯から210世帯に半減したが、行政区長の斎藤智博さん(72歳)のリーダーシップのもと、次々とグループ活動が立ちあがり、以前以上に住民同士の交流が活発になっている。

震災後にUターンしてきた斎藤さんが、乞われて区長になったのは2013年4月。地域の拠りどころである牛橋区民会館は、津波で壁がぶち抜かれたままで、電気も通じていない状況だった。それをあの手この手で修繕し、備品を揃えた。翌年1月には、住民の皆さんと月1回の地域サロン「華の会」(約30人)を立ちあげ、それ以降、月2〜3回小物づくりを楽しむ「ひまわりの会」(約15人)、週1回の「ダンベル教室」(18人)、月1回の「男の料理教室」(20人)、月1回高齢者が集う「喜楽サロン」(約10人)、ほぼ毎日野菜づくりを楽しむ「菜果好会」(16人)が発足。さらに昨年11月には、この6団体を横串に刺す形で住民交流をしようと、区

民会館に約80人が集まり大盛況となった。

毎年末には、行政区役員や6団体のメンバーとともに、区民会館を大掃除したあと、「1年の無事に感謝しよう」と餅つきをするのが恒例に。前日から60kgのもち米を用意し、小豆・胡麻のほか、200人分のお雑煮を調理して1皿百円で提供。この日のために何度も会議を開いた成果もあって、男性も女性も手際よく準備し、雨模様にもかかわらず11時には地域の人たちが約60人集まって、餅つきやビンゴ大会を楽しんだ。被災して引越した元牛橋区民も、「この日を楽しみにしていたの」と笑顔でおしゃべりに花を咲かせた。「夏祭りのときは、お盆で帰省する子ども世帯なども加わって、もつとにぎやかになる。新旧の住民をたいせつにしたい」と斎藤さんは話す。

牛橋区民会館は、住民の要望により今年12月に内陸側に移転、避難所を兼ねて新築される。「すべての活動は、牛橋での暮らしを守るため」と言い切る斎藤さんが、地域を育て、輪を広げているのは間違いない。

● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ。(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆、CLC発行)。



方言と手話

ご近所福祉クリエイション主宰 酒井保

広島県人としての僕

「広島から来ました酒井と申します」

東北で活動する際には、必ず「広島から来ました」という言葉を冠におくようにしている。もちろん、郷土愛というのが大きき理由であるが、これには一つ大きな弊害が生れる。どういふことかという「広島から来ました」と挨拶すると必ずと言っていいほど、「カーブは強いですね!」「赤ヘルががんばってますね!」という言葉が返ってくる。こちらに気を使い、わざわざ話題をつくってくださっていることは重々承知のことなのだが、これが僕にとって最大の苦痛なのである。それはなぜか?

なんと!僕は、プロ野球のことがまったくせんせんわらない!……のである。

昨年、広島カーブは25年ぶりのリーグ優勝を果たした……これくらいのことにはわかつた、このニュースに胸が熱くなつた。しかし、本質的な「野球」の話題になると、乗っかることができず、疎外感すら感じてしまうことがある。

幼少のみぎり、こんな経験をしたのを覚えている。原っぱで仲の良い友だち数人と遊

んでいたところへ上級生のグループがやって来て、「おい!一緒に野球をやらないか?」と誘ってきた。僕以外の全員が「うん!やる!やったー!」と言って歓声をあげたが、僕は、「つまらないなあ」と思っていた。

上級生の一人が、「よし。それじゃあチームを分けて、それぞれポジションを決めようぜ。俺はピッチャーをやる。お前たちはどうする?」と聞いてきた。

友だち皆は、「俺、サードやりたい!」「僕は、ショート!」と、身を乗り出して主張していたが、サードやショートという意味が、僕には不明で何かしら呪文のように聞こえていた。

チンパンカンパンのなか、「おい。酒井はどこを守る?」と友だちの一人が聞いてきた。

「巨人の星」というテレビアニメがあることは知っていたが、僕の選択肢にはなかった。あつたのは『アタックNo.1』で「星飛雄馬」というヒーローの名前から知っていたが、それよりも「鮎原こずえ」というヒロインを愛した。

「酒井はどこを守る?」……その問いに対し、無知の僕は、その無知を悟られまいと、もつたいつけて、自分を指さしながら「俺?じゃあバッターや

る!」と応じた。結果、全員大爆笑!その後、半年間の僕のあだ名は「バッター酒井」となった。

東北の言葉と講師業

東北で活動する際に「広島から来ました」を主張しているのには、もう一つ理由がある。それは、『言葉の壁』から身を守るということ。「広島の人間です。東北の言葉はあまりよくわかりません。だから、標準語でお願いします」という意を察してもらうための台詞なのである。『言葉の壁』とは、つまり方言のこと。講師業を生業としている僕は、この『言葉の壁』により思考停止したという場面を幾度か経験している。

昨年の晩秋。秋田県某市より講演登壇の相談をいただいた。戸惑いもあったが、せっかく頂戴したご縁である。悩んだあげく、主催者側に『言葉の壁』のことを正直に伝え、「質疑などの際に語らせる、方言については、通訳すること」を条件に登壇させていただくことを決心した。(自分のなかでは、「勇気ある決断」と評価している)

講演当日。楽屋で出番を待っていた僕は、『言葉の壁』のこ

とばかり考えていた。そんな思いをしているところへ、「本日、手話通訳をさせていただきます。よろしくお願ひします」と、4人の手話通訳者が楽屋挨拶に来てくださった。「ああ……神様!」僕は心のかで咬いた。『言葉の壁』への不安は、手話通訳者の方々の存在により払拭されたのである。それはなぜか?

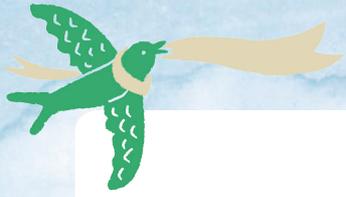
方言も手話も日本語だ!

僕は、広島県手話通訳問題研究会というところに所属しており、「手話」の理解が多少なりともできる立場にあることをそのとき思い出したのである。講演のあと、方言による質疑もあったが、「手話」のおかげで『言葉の壁』を越えることができた。

「手話も日本の言語である」とは、聞かない仲間たちの主張であり、手話の理解を広めようとしている人たちの主張でもある。「方言」という日本語の理解を「手話」に求めるといふ経験ははじめてだった。しかし、なぜか素敵な感じがあった。

広島県人の僕にとって「手話」は、東北で活動していくうえで必要な「日本の言語」であると痛感した。

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

新年の抱負？

この情報紙の私の編集長より、新年にあたっての抱負ぐらい、まじめに考えろ!と言明されました(注:そんなことは言いません by 編集部)。隣のコーナーの浜上さんなら、毎年しっかりと1年の計を考えることと存じます。編集長から「もっと人生をまじめに考えろ」とお灸をすえられた想いです。

確かに、ここ数年、十数年、今年目標、抱負と縁がありません。弁解ですが、1年単位で考えることは好きではありません。できないと気分が悪いし、1年単位で達成できるとハードルが低いようで癪にさわる。要は「偏屈・頑固・ひとりよがり」の悪い性格のせいです。

ただし、この支援事務所を任されていることで、偏屈の虫としてこだわっていることがあります。復興に向けて盛んに言われる『主役は住民』という建前を、本音で具現化したい、ということ。その最大のミッションが、サポートセンターの機能である地域力強化。つまりは、サポセンを支えた人財を今後活かすこと。平時の地域社会で、自らもつ地域力を地域の皆さんと共有し、互助の仕組みを築いていく住民を応援していくこと。平時(というが、非常時と同じ課題を抱えるいま)に行政や専門職をだしにして、地域の豊かさを築いていくこと。行政から言われたから築くのでは、手柄は行政にもっていかれます。そんなことに加担したくない、というのが本音です。

一方で、要介護認定者が増えるばかりでは介護保険が破たんしてしまうことも感じています。だから、介護予防なんてことのためには動かないけれど、生きがいや居場所づくりを通じた楽しい社会参加・活動なら考えてもいい。これに徹したい。

ここで何回も述べてきましたが、専門職や行政の達成感を充足するための地域づくりは間違いです。私も、専門職のもつ力を過信してきました。地域のことは、地域の人たちで意思決定していく。その調整役、ファシリテート役として、当事者性をもつ人財を活かす責務があると思っています。

編集長、如何でしょうか？

ひとりごと

サポーターのあなたへ



宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章

“経験”と“強み”と“弱み”を 考える

昨年末、某テレビ局で元プロ野球選手の清原和博さんのインタビュー番組が放送された。昨年2月に覚せい剤使用で逮捕され、刑務所の独房生活を経験して執行猶予付きで仮釈放された。西武ライオンズ、読売ジャイアンツなどで活躍したプロ野球界の大スターであった彼が引退後、覚せい剤に手を染めた。いま、彼は深い反省のなかで専門家の治療と学びを続け、必死で覚せい剤の魔力と闘っている。辛い心情をときに涙ながらに語る彼の姿は、傲慢さも濁りも消えた清らかさが滲んでいた、という私の印象。『過去は変えられない。前へ向いていくしかない』『こんなアホなおやじですけど、息子に会いたいです。会いたいです・・・』『もう一度清原和博をやり直して、野球に向き合えるように1日1日闘っていくしかない』偽りのない彼の姿、言葉からは強い何かを伝える力があふれていた。彼は、必ず克服する。栄光とどん底の経験をした彼は、必ず社会に良い意味での強い大きな影響を与える存在になる、と確信した。これからは何度も揺れながら、でも必ず立ち直ると。そして、思った。彼は、この経験をするためにこの世に生まれてきたのではないかと。この経験から、彼しかできない何かを全身で世間に伝えるために生まれてきたのではないかと・・・。

人生、誰にもいろいろある。良いも悪いも、強みも弱みも、揺れながら、両方経験している。それが人間なんだろうなど。人生なんだろうなど・・・。

この頃思う。“弱み”と言われるもののなかに“真の強み”があるのではないかと。人生に“失敗”と言うものは無くて、あるのは“次につながる経験”があるだけだ、と。“負の経験・失敗・弱み”は、いつか自分の中で受容し、そこにプラスの意味に気づき、価値を見出したときから“強み”に変わり、他者に、地域に、社会に伝えることで、自分も他者も地域や社会も活かされる。良くなって行くのではないかと。

平成28年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

分野別研修 I

子育てと子育て家庭への支援の形

応用研修 5

有償サービスの立ち上げと運営の方法

【気仙沼会場】1月23日(月) 気仙沼保健福祉事務所

【仙台会場】1月24日(火) エスポールみやぎ

講師：塚本 秀一(社会福祉法人湘南学園専務理事、保育の家しようなん 園長)
門馬 優(特定非営利活動法人 TEDIC 代表理事)

【仙台会場②】2月6日(月) 宮城県自治会館

講師：志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

吉田 瑞穂(中津市社会福祉協議会 地域福祉課 生活相談支援係長)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

「第1回 宮城発 これからの福祉を考える全国セミナー」開催!

介護保険制度改正を受けてスタートした「新しい総合事業」と「生活支援体制整備事業」は、自治体が内容を決め地域住民とともに育てる事業。このセミナーは、地域住民がその制度を活用し、住みよいまちをつくること、また多様な主体が参画する「地域づくり」や「支え合い体制づくり」の推進を目的として開催します。

日時 2017年2月2日(木) 10:30~17:30

場所 仙台福祉プラザ2階 ふれあいホール

10:30~10:50 <今、なぜ宮城発のセミナーなのか>

宮城県保健福祉部 次長 千葉隆政、宮城県社会福祉協議会 事務局長 佐藤光敏、宮城県保健福祉部長寿社会政策課 課長 成田美子

10:50~12:20 <第1部 被災者支援従事者実践からの気づき>

石巻市社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター 小松沙織、福島県 建設技術学院跡地応急仮設住宅自治会 鎌田優、南三陸町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター 芳賀裕子、宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸、東北福祉大学 教授 高橋誠一

13:05~15:05 <第2部 生活支援コーディネーターを支援する市町村等の取り組み>

多賀城市保健福祉部介護福祉課介護予防係 主幹兼係長 高橋洋之、仙台市 小松島地域包括支援センター 生活支援コーディネーター 岩井直子、岩手県北上市保健福祉部長寿介護課包括支援係 主任 高橋直子、東京都武蔵野市健康福祉部高齢者支援課相談支援係 生活支援コーディネーター 横山美江、全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田昌弘、仙台白百合女子大学 准教授 志水田鶴子

15:20~17:15 <第3部 地域支援事業を支援する県等の取り組み>

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 上席主任研究員 岩名礼介、厚生労働省 東北厚生局 健康福祉部 地域包括ケア推進課 課長 内山徹、宮城県保健福祉部 長寿社会政策課 介護保険推進班 班長 阿部博敬、仙台市健康福祉局保健高齢部高齢企画課包括支援係 係長 星努、宮城県社会福祉協議会 地域福祉部 西塚国彦、全国コミュニティライフサポートセンター 調査研究・情報グループ グループ長 田所英賢、仙台白百合女子大学 教授 大坂純

17:15~17:30 <クロージング・まとめ>

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議 運営委員会委員長 大坂純

参加無料!

定員 300人

主催 宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議

申し込み先 同会議事務局 [担当 村上・荒井]

(宮城県社会福祉協議会 地域福祉部)

TEL 022-266-2621

FAX 022-266-3953

MAIL g010@miyagi-sfk.net (村上)



地方創生・新しい総合事業 大見本市
地方創生、介護保険・総合事業のヒントがあります!

入場料無料!

住民同士の支え合い活動を称え合い、学び合う「S-1 グランプリ 第4回いがす大賞」。全国から集まった25団体より、11組の本選出場が決定しました! ご応募いただいた皆さま、ありがとうございました!

2017年2月26日(日)

せんだいメディアテーク1階「オープンスクエア」

で開催します。事前申込は不要! どなたでもご覧いただけます! 心おどるステージ発表、ユニークな活動紹介を生で!

出場者(全11組)

- | | |
|----------|----------------------|
| 岩手県陸前高田市 | NPO 法人 総合型りくぜんたかた |
| 岩手県大槌町 | 人形劇団 あんど娘 |
| 岩手県大槌町 | 新おおつち漁協女性部 |
| 宮城県岩沼市 | ちびぞうくらぶ |
| 宮城県丸森町 | TAKE1060 プロジェクト実行委員会 |
| 宮城県川崎町 | 新町茶話会サロン |
| 宮城県仙台市 | 気仙沼はまらいんや会 |
| 福島県西会津町 | サロン茶屋 |
| 福島県福島市 | みんなの家@ふくしま |
| 香川県丸亀市 | トントントンカラリン隣り組活動隊 |
| 熊本県益城町 | 益城だいすきプロジェクト・きままに |

お知らせ

☆次号予告 特集「老人クラブ」

平成28年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修事業

<生活支援コーディネーター基礎・実践研修>

【仙台会場②】2月13日(月)~14日(火) 宮城県自治会館

講師: 高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)

志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

平成28年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<地域福祉コーディネーター基礎・実践研修>

【仙台会場③】2月16日(木)~17日(金) 宮城県自治会館

講師: 藤井 博志(神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 教授)

井岡 仁志(高島市社会福祉協議会 事務局長)

<応用研修2 地域福祉コーディネーター中堅研修>

【仙台会場②】2月23日(木)~24日(金) 宮城県自治会館

講師: 藤井 博志(神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 教授)

浜上 章(宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー)

浅野 恵美(美里町社会福祉協議会 地域福祉課長)

眞籠 孝史(東松島市社会福祉協議会 地域福祉推進係 コミュニティソーシャルワーカー)

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

Vol.51の特集ではサロンに集い、語らい、遊び、皆さんが「今」を大いに楽しんでいらっしゃる様子が印象的でした。時に支える側に立ち、誰かの役に立つことは生きがいにつながるのですね。人と人、生活と行政・福祉の交差点であるサロン。遠方でひとり暮らしをしている私の祖母の町にもあるのかなと思いました。(仙台市青葉区 S・N)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joh@clc-japan.com

編集後記

今回取材した花の会では、甘くて水々しい味わいのりんごの煮物など、会員の方から手づくり料理をいただきました。南郷三区自治会でも、会長にお話を伺いながら、お食事をごちそうに。おいしいお食事に、話も心なしかはずみ、サロンなどで行われている「食を通じた交流」の効果を感しました。(田中)

バックナンバーがホームページで読めます!
http://www.clc-japan.com/sasaesai_j/

東日本大震災・被災者の暮らしを豊かにする 月刊 地域支え合い情報 53号 発行日: 2017年1月20日

編集: 東北関東大震災・共同支援ネットワーク地域支え合い情報編集委員会 発行: 特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)
宮城県仙台市青葉区木町16番30号シンエイ木町ビル1F TEL022-727-8730 FAX022-727-8737
E-mail joh@clc-japan.com URL <http://www.clc-japan.com/>